

厚生労働科学研究費補助金（長寿科学総合研究事業）  
分担研究報告書

Question	Response categories	Code	Family dependent	Locally integrated	Local self-contained	Wider community focused	Private
5. If you have friends in this community/neighbourhood, how often do you have a chat or do something with one of your friends?	Never/no friends Daily 2-3 times a week At least weekly At least monthly Less often	A B C D E F		B C D	E F	B C D	A     F
6. How often do you see any of your neighbours to have a chat with or do something with?	No contact with neighbours Daily 2-3 times a week At least weekly At least monthly Less often	A B C D E F	A   E F	B C D	D E	D E	A     F
7. Do you attend any religious meetings?	Yes, regularly (at least once a month) Yes, occasionally No	A B C	B	A	B C	A B	C
8. Do you attend meetings of any community/neighbourhood or social groups, such as old people's clubs, lectures or anything like that?	Yes, regularly (at least once a month) Yes, occasionally No	A B C	B C	A	B C	A	C
NETWORK TYPE (highest number)							

Information received from:	All from client/patient	1
(code as appropriate)	Some or all from proxy	2

（附表2）ネットワークアセスメント指標（C.Wenger のバリエーション）

（厚田村 2004年調査）

質問	回答	番号	地域内親族限定型 A	地域内資源積極的参与型 B	地域内資源消極的参与型 C	非親族資源参与型 D	孤立型 E
最も近くに住んでいる子ども	同居 厚田村 近郊町村 札幌 道内 道外他 子ども無し						
最も近くにすんでいる「きょうだい」	同居 厚田村 近郊町村 札幌 道内 道外他 きょうだい無し						
最も会っている子どもとの会う頻度	毎日 週1回 月1・2回 年に数回・盆暮れ 会わない						
近所付き合い	よく行き来する ちょっとした頼み事 挨拶程度 近所にいない						
度々会う友人	いる いない						
社会参加	参加団体あり なし						
ネットワーク類型							

2005.12

ネットワーク類型（2004年 厚田）

- A 地域内親族限定型：ネットワークが配偶者、子どもとその配偶者、きょうだい中心。夫婦のみ、子との同居（特に娘家族）に多い。女性未亡人、収入少ない、虚弱が多い。家族・親族以外の社会的接触が少ない。
- B 地域内資源積極的参与型：ネットワークが多様な種類にまたがっている。健康な高齢者、社会参加も活発。
- C 地域内資源消極的参与型：積極的参与型に比べ、社会参加がない。
- D 非親族資源参与型：子どもや親族との関係は疎遠だが近隣・友人とのネットワークを持ち、社会参加も活発である。子どもが近くにいない、健康な、夫婦のみ世帯に多い。その場合は配偶者がサポート者として選択される。
- E 孤立型：子ども・親族、友人・近所付き合いも疎遠である。社会参加や趣味も少ない。ひとり暮らし、夫婦のみに多い。虚弱老人に多い。子どもがいないか、いても近くにいないか疎遠である。

研究成果の刊行に関する一覧表

書 籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の 編集者名	書 籍 名	出版社名	出版地	出版年	ページ
笹谷 春美	「福祉労働のジェンダー課題—介護労働の専門性—」	杉本貴代栄	『フェミニスト福祉政策原論』	ミネルヴァ書房	京都	2004	23-42

雑 誌

発表者氏名	論文タイトル名	表誌名	巻 号	ページ	出版年
岸 玲子、堀川 尚子	「高齢者の早期死亡ならびに身体機能に及ぼす社会的サポートネットワークの役割—内外の研究動向と今後の課題—」	日本公衆衛生雑誌	51 巻 2 号	79-93	2004
中川 仁	「回復期リハビリ病棟立ち上げにあたって—需要分析とマーケティングの視点から—」	治 療	87 巻 2 号	383-386	2005
笹谷 春美	「高齢者介護をめぐる家族の位置：家族介護者の視点からの介護の「社会化」分析」	家族社会学研究	16 巻 2 号	36-46	2005
岸 玲子、浦田 康成、西條 泰明、堀川 尚子、吉岡 英治、佐藤 徹郎	「高齢者の抑うつに及ぼすストレスフルイベントと社会的サポートネットワークの役割—北海道における縦断研究」	精神神経学雑誌	107 巻 4 号	369-377	2005
中川 仁	「Global Standard の医療の視点から：オーストラリアの脳卒中医療—Hunter Stroke Service—」	治 療	88 巻	(印刷中)	2006
三觜 雄、岸 玲子、江口 照子、三宅 浩次、笹谷 春美、前田 信雄、堀川 尚子	「ソーシャルサポートネットワークと在宅高齢者の検診受診行動の関連性—社会的背景の異なる三地域の比較—」	日本公衆衛生雑誌	53 巻 2 号	(印刷中)	2006

# にしんの村は今 7.2

北海道厚田村の  
地域ケアと高齢者の生活調査

2006年3月

北海道教育大学札幌校社会学研究室

笹谷春美

神奈川県立保健福祉大学社会福祉学科

太田貞司

北海道工業大学環境デザイン学科

椎野亜紀夫

# 目 次

はじめに

第一章 厚田村の概況 . . . . . 3

第二章 厚田村の高齢者の健康と生活・石狩市への合併前の姿・

ーアンケート調査分析ー . . . . . 13

1. 調査の対象と方法 . . . . . 13

2. 回答者の基本的属性 . . . . . 14

3. 健康状態と介護保険・サービス利用 . . . . . 29

4. 社会関係とサポートネットワーク . . . . . 33

5. 日常生活ー現状と問題点 . . . . . 45

6. 今後の予定と厚田村への要望 . . . . . 54

第三章 石狩市厚田圏域（旧厚田村）の要介護認定者の状況と課題 . . . . . 62

1. 石狩市厚田日常圏域 . . . . . 62

2. 石狩市の日常生活圏域の特徴 . . . . . 62

3. 厚田日常生活圏域における要介護高齢者 . . . . . 63

4. 厚田日常生活圏域での介護予防の取り組み . . . . . 63

5. 厚田日常生活圏域でのこの間の取り組みの特徴と基盤整備 . . . . . 64

6. 厚田日常生活圏域における介護保険創設時の課題 . . . . . 64

7. 厚田日常生活圏域の特徴と今後の課題 . . . . . 65

資料

附表1 . . . . . 68

附表2 . . . . . 70

高齢者の生活と健康についてのアンケート調査 . . . . . 71

## はじめに・・本報告書の目的と概略・・

本書は、2004年12月から2005年1月に行われた厚田村の『高齢者の生活と健康についてのアンケート調査』の結果報告である。それに先立ち、厚田村および隣村の浜益村の保健・福祉サービスや介護保険の実施状況などについて関係者の方々に数回の聞き取り調査を行ってきた。本書には、その分析結果も同時に収められている。

私たちが、なぜ人口3000人弱の過疎の村に着目したのか、また、この調査報告の意義はどこにあるのかについて以下に述べたい。

「過疎化・高齢化」が進行している札幌近郊の厚田村は1996年に町から市となった石狩市に隣接する半農・半漁業の地域で、最盛期はにしん漁で栄えた村である。オホーツク海の沿岸沿い石狩市、厚田村、浜益村が札幌から北の稚内方面に向けて連なっている。同様にかつてにしん漁で栄えた隣村の浜益村と厚田村は介護保険導入時、介護保険料の格差で注目された。厚田村は札幌市や石狩市のベッドタウン的な団地が造成されたためそれほど高齢化率は高くなかった(26.1%、H12. 10. 1 現在)が、隣の全道一高齢化率が高い浜益村(39.9%)に比べ介護保険料がかなり高く設定され、要介護認定者も多かった。

介護保険システムにおいて介護認定者の数と保険料の徴収額は自治体にとっても住民にとっても大きな関心事である。その違いを生み出す理由は何なのか？この問いが2つの村の保健・介護サービス行政および村人たちの生活実態の調査を企図する1つのきっかけであった。

調査をするまでも無く明らかな要因もあった。介護保険施行時には厚田村にはベッド数80の特別養護老人ホームがあり、浜益村にはなかったことなどである。その後、浜益村にも特養が出来、現在では保険料はそれほど変わらなくなっている。

しかし、高齢者の介護保険制度の認知度や利用をする・しないの背景は、村の人々の生活と健康の実態をより詳しくみなければわからない。そこでまず、2002年に浜益村で当時70-80歳の男女全数にアンケート調査と聞き取り調査をおこなった(北海道教育大学札幌校社会学研究室、2002『ニシンの村は今』)。その結果、幾つかの知見が得られた。一つは、高齢者のニーズを早めに汲み取り、自治体独自のサービスでカバーし結果的に介護保険の対象になることを遅らせる、というケアマネを中心とするケア対策のあり様であり、2つには、農漁業自営業者が多いことからまだ現役で働いている人も少なくなく健康な高齢者が多いこと、3つ目に、過疎地といっても村外に流出した子どもたちの多くが大都市札幌に住み、拡大家族としてサポートネットワークの機能をはたしていること、4つ目に介護保険制度の認知度がまだ低いことなどであった。

今回の厚田村調査はその継続として位置付けられた。しかし、厚田村調査は最初の目的以上の意味を有することになった。その理由は、調査を実施したのは2004年12月から1月であったが、この間、石狩市と厚田村および浜益村の市町村合併の協議が行われ、2005年10月一日に両村は石狩市に編入されたことである。当然、保健医療計画や介護保険サー

ビスの供給体制は再調整されることになる。しかも、2006年4月からは改正介護保険制度の実施を控え、両村は、大きな変化の渦中にある。

従って、本調査は、合併前および介護保険改正前の厚田村の高齢者の状態をあらゆる貴重なデータとなることであろう。特に調査期間が12月から1月であったため、厚田村の厳しく長い冬季間の高齢者の生活を浮かび上がらせている。

今回の調査を改正介護保険制度の重点である介護予防という観点から分析した結果、幾つかの知見が得られた。一つは、新・予防給付の対象と予想される「リスク」グループと介護予防事業の対象者と予想される「虚弱」グループを合わせると、対象者の4割強がそれにあたることである。更に、認知症や寝たきりの発生にも関連すると言われる「外出が週1回以下」の「閉じこもり」状態の方が、約半数存在することである。そして、浜益村と同様、多くの子どもたちは札幌に流出し、これらの子どもや配偶者を中心としそれに他の親族が加わった社会関係（ネットワーク）のもとで暮らし、地域社会への参加があまり活発ではない人々が多く存在することが明らかとなった。従って、何かあった時のサポートネットワークも第I義的には配偶者・子どもが中心であり、公的サービスの選択はまだ少ないことも判明した。また、「閉じこもり」がちで「虚弱」なグループには、一人暮らし、女性、低収入など階層的な弱者が多く見られた。

以上のように、アンケート調査によって個々人の実態を知ることにより、地域としての保健福祉行政の課題とターゲットが見えてきたのではなかろうか。今後、これらの方々へは面接調査等で個々人にあった介護予防プラン等が作成されることが望ましいと思われる。

本調査は、特定の時期の特定の年齢階層（70-80歳）の高齢者に限定されたものではあるが、これらの分析結果が、石狩市厚田区の今後の介護保険サービスやその他の地域支援政策に何らかの役に立てば幸いと考える。

アンケート調査の実施や聞き取り調査において、厚田村の関係者の方々には多大なご協力を頂いた。特に、当時の保健福祉課の村本慶幸課長およびケアマネージャーの池垣和子さんには大変お世話になった。また、何よりもアンケート調査にご協力を頂いた155名の方々にも、この紙面をお借りして感謝の意を述べたい。

なお、本調査研究は、厚生労働科学研究費補助金・長寿科学総合研究事業「要介護状態の予防ならびに介護の質を改善するための方策に関する研究」（2004-2005 研究代表者 岸玲子・北海道大学医学研究科）の一部を使って行われたものである。

2006年3月31日

北海道教育大学札幌校社会学研究室 笹谷春美

神奈川県立保健福祉大学社会福祉学科 太田貞司

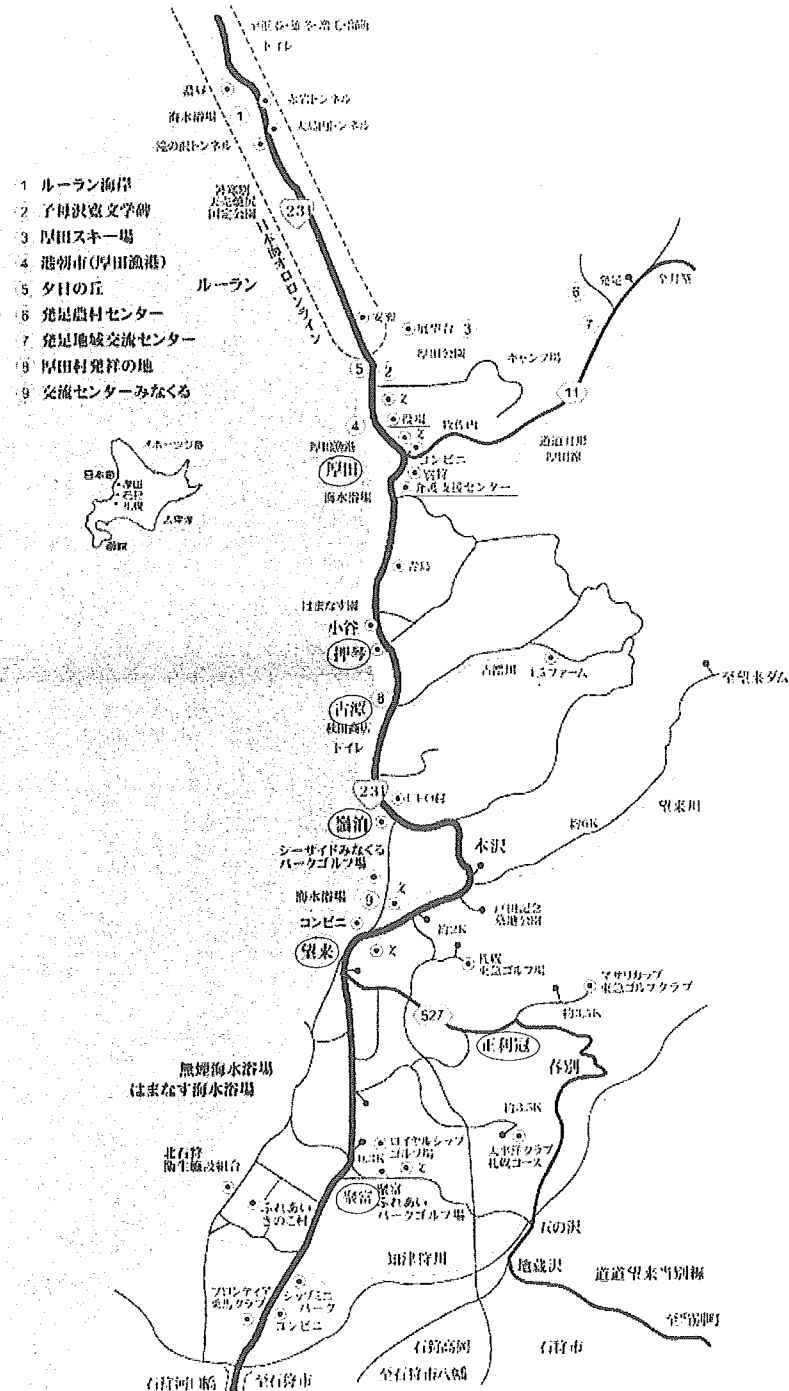
北海道工業大学環境デザイン学科 椎野亜紀夫

# 第1章 厚田村の概況

## 地勢

総面積 292.83 k m<sup>2</sup>、石狩平野西北部から北に広がる丘陵地帯を形成し、背後に大小の山々が起伏して増毛山系に連なっている。大陸及び日本海流の影響を受け晩秋から春にかけて強い北西風が吹き、積雪量が多いものの年間を通じて比較的温暖な地域である。

図表1 厚田村の地図



(出典：旧厚田村ホームページ)



## 産 業

主要産業は農業と漁業であり、農業では米、いも類・野菜、工芸農作物（てんさい）、乳用牛（生乳）が主な生産物となっている。販売農家数は2000（平成12）年の時点で160戸、内専業農家が59戸、兼業農家が第1種・第2種合わせて101戸という状況になっている。

漁業では厚田・古潭漁港の2港が設置され、サケの他にニシン、ハタハタ、タコが特徴的な魚種で、ホタテ稚貝の生産等も行われている。近年では厚田漁港における朝市が注目されており、2004（平成16）年には厚田・石狩・浜益の3市村の漁業協同組合が合併し石狩湾漁業協同組合が発足している。

その他、強い北西風を活かした風力発電や、別荘地として開発が進んでいる。

## 成立過程

17世紀後半、松前氏が古田作兵衛に作らせた地図「新御国絵図」（1661年）に「アツタ」の名が載っており、また1700年に江戸幕府に献上された「元禄松前御国絵図」にも「アツタ」「オショロコツ」（押琴）の名が見える。松前藩は1706年に石狩・厚田・増毛の3場所を開き、家臣に禄の代わりに漁場を与え、家臣はその経営を商人に代行させていた（場所請負制）。しかし厚田に居を構え永住した和人は19世紀後半までおらず、ニシン・アキアジ漁などの出稼ぎの場としての地域であった。また、1840年以降は増毛以北にも本州・松前地方からの出稼ぎの許可が下りるが、それまでは厚田が北限であった。「西蝦夷日記」（1850年）には当時オショロコツには出稼ぎの和人が1万人もいたとあり、運上屋も建てられ大いに賑わっていた。

1869年運上屋制度が廃止されて開拓使扱いとなり、戸長役場が置かれ厚田郡となる。この頃になると本州各県から次々と和人の集団移住が始まり、1871年には仙台から約160名が聚富に仮住、庄内地方から45名が望来に移住している。以降もこのように各県からの団体移住者によって各集落が形成された。

1902年、戸長制度の廃止と2級町村制の施行により、聚富、望来、嶺泊3村を合わせて望来村とし、古潭以北の7村を合わせて厚田村となった。その後1907年に1級町村制が施行され、望来と厚田を合わせて厚田村となり現在に至っている。

## 人口・世帯の推移

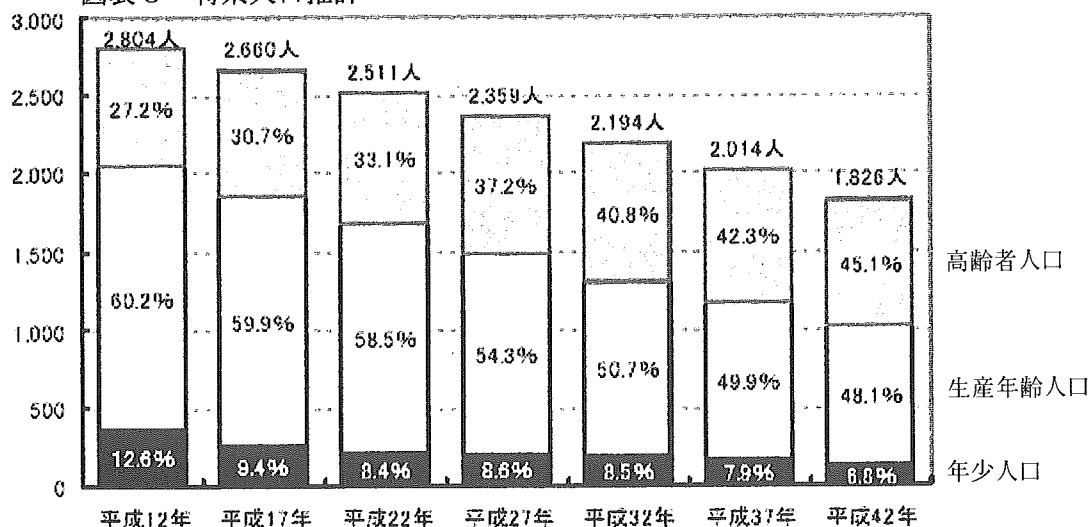
1920（大正9）年には7,256人あった人口はその後太平洋戦争前後で増減し、特に1950（昭和25）年の調査ではニシンの豊漁に合わせ6,722人まで回復した。しかし1955（昭和30）年の調査以降はわずかな増減はあるものの、ニシン漁の突然の不漁、小規模農業者の離農また林業の衰退等による若年者人口の減少や生産年齢人口の流出で減少傾向が続き3千人台にとどまっていた。その後、1980年代の後半に入りサケ漁など育てる漁業の確立や、農業経営の大型化による離農の減少、更にはトーマン団地への定住が進んだことから

人口の減少に歯止めがかかり横ばい状態となったものの、1995（平成7）年には2,947人と3千人を下回り、2000（平成12）年時点では総人口2,804人となっている。

図表2 地区別の人口・世帯数（2005年4月現在）

区分	面積(km)	世帯数	人口	男	女
聚富	14.6	328	856	437	419
望来	77.9	206	484	245	239
字正利冠		37	87	42	45
嶺泊	8.2	19	50	25	25
古潭	21.4	36	79	46	33
押琴	0.3	-	-	-	-
小谷	4.1	90	100	69	31
別狩	58.9	135	323	166	157
発足		38	113	57	56
厚田	80.2	335	661	297	364
安瀬	14.3	8	19	10	9
濃昼	12.9	5	12	5	7
合計	292.8	1,237	2,784	1,399	1,385

図表3 将来人口推計



資料：国勢調査(平成12年)、社会保障・人口問題研究所「小地域簡易将来人口推計」(人口予測)

注) 平成12年の総人口には年齢不詳者を含む

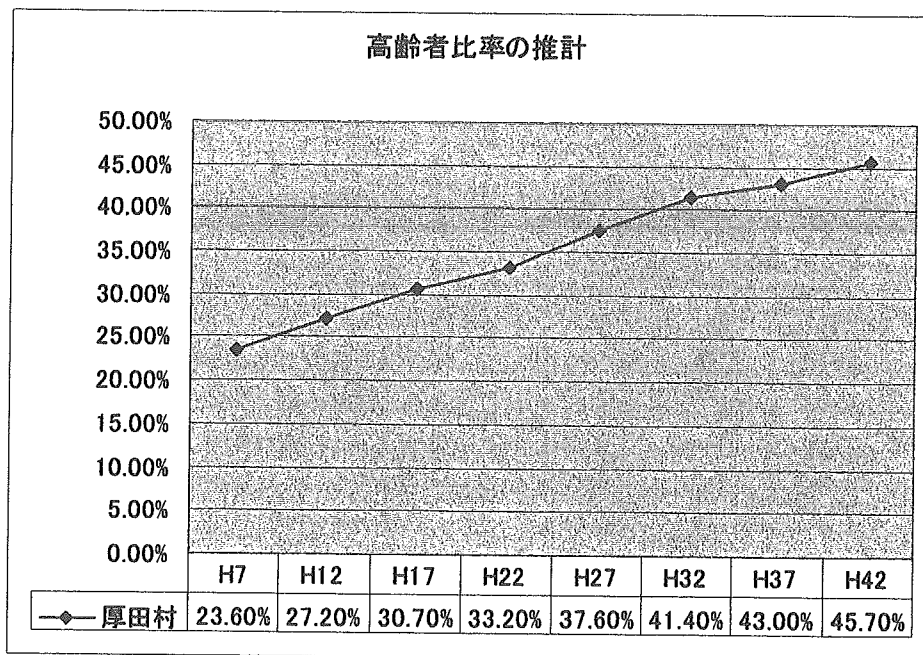
また、2001（平成13）年における自然増減（出生数と死亡数）と社会増減（転入と転出）の合計（純増減）は64人減となっている。このようにここ数年若干の減少傾向にあり、推計では2030（平成42）年には1,826人と2千人を割ると予想されている。

図表4 人口動態（2001年）資料：北海道総合企画部

増減数		Δ 64	
自然増減	Δ 26	社会増減	Δ 38
出生	16	転入	106
死亡	42	転出	144

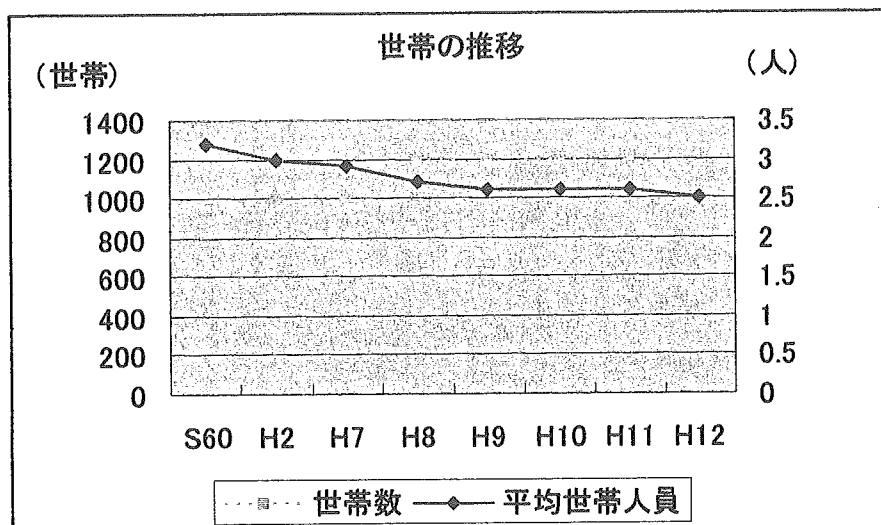
高齢者比率は年々増加し、2000（平成12）年には27.2%と道平均値（18.2%）・全国平均値（17.3%）を大きく上回り極めて高いものとなっている。2005（平成17）年には30.7%と3割超に、2030（平成42）年には45.1%と半数近くが高齢者となる見込みである。

図表5 高齢者比率の推計



世帯状況の推移としては、1920年から2000年までの調査を通じて1千世帯前後と横ばいであるが、世帯の平均人員は減少し続け、核家族の占める割合が道平均値（60.5%）を下回るものの57.3%と半数を超えている。また2000年には全世帯の内高齢単身世帯の占める割合が11.5%と道平均7.4%を大きく上回っている。

図表6 世帯数の推移



資料：厚田村 2000 年版資料編、数値は各年国勢調査（昭和 60～平成 7 年）と住民基本台帳 4 月末時点（平成 8～12 年）による

図表7 世帯の内訳

区 分		厚田村	北海道
一般世帯数(世帯)	総数:(a)	1,013	2,277,968
	親族世帯	754	1,586,366
	核家族世帯:(b)	580	1,379,076
	その他の世帯	174	207,290
	非親族世帯	1	9,329
	単独世帯	258	682,273
核家族世帯割合:(b)/(a)*100		57.30%	60.50%
単独世帯割合:(c)/(a)*100		25.50%	30.00%
65歳以上の親族のいる一般世帯数(世帯)	総数	489	694,875
	親族世帯	373	525,725
	核家族世帯:(d)	219	359,046
	その他の世帯	154	166,679
	非親族世帯	-	812
	単独世帯:(e)	116	168,338
一般世帯における核家族世帯数に対する65歳以上の親族のいる核家族世帯数の割合:(d)/(b)*100		37.80%	26.00%
高齢単身世帯割合:(e)/(a)*100		11.50%	7.40%

資料：石狩市・厚田村・浜益村合併協議会「新市将来構想」

## 厚田村の地域ケア

### (1) 施設ケア

厚田村には、1980年（昭和55年）に開設された特別養護老人ホーム（介護老人福祉施設）厚田みよし園がある。特養の定員は80名であるが、いつも満床で現在も約20人の待機者がいる。高齢化が進み、子どもが近くにいない場合、あるいは村内にいても在宅ケアが困難な高齢者と家族にとって、安心して入居できる施設としてのニーズは高い。隣村の浜益村にまだ特養が開設されていなかった時期は、浜益村や当別町など厚田村を越えて近隣町村の唯一の特養としてその機能を長らく果たしてきた。

みよし園のサービスは①入居施設②デイサービス（デイサービスセンターしおさい：一回10人まで）③ショートステイ（6床）④ミニデイ などがある。

入居者の要介護度別利用者数は、

要介護1	男1名	女9名	
要介護2	男1名	女7名	
要介護3	男6名	女11名	
要介護4	男7名	女9名	
要介護5	男5名	女22名	合計78名（2名は入所準備中）

である（2006年3月現在）。

デイサービスの1ヶ月のべ利用者数は、2006年2月分で利用人員161名（内介護予防12名）で1日平均7名の利用である。

ケアスタッフとしての介護職員は29名（男7名、女22名）で、保有資格は以下の通りである。

介護福祉士	男4名	女10名	合計14名
ヘルパー1級		女1名	合計1名
ヘルパー2級	男2名	女6名	合計8名

無資格（社会福祉主事2名含む）男1名 女5名 合計6名

この他に準看3名、正看1名がいる。ケアマネージャーは1名であるが、有資格者は4名いる。

現在、一部の住民は隣の当別町の施設のデイケアサービスを利用している。

### (2) 診療所

平成15年より、それまでの直営診療所から民営（札幌にある病院の分院という形）に切り替わった。

常勤の医師1名、看護婦2名の体制である。診療所は直営時と同様、土・日休み、夜間はやらないが救急体制は整ってきた。また、医師の往診も積極的となり、住民の信頼も厚

くなった。

しかしまだ多くの住民は札幌市や石狩市の病院へ通院している。村の診療所には入院設備が無いため「何かあったら心配」という意識が強いためと思われる。

### (3) 在宅介護支援センター

ケアスタッフは、ケアマネージャー2名（1名は保健師で厚田村保健予防係長と兼務。1名は介護福祉士）とヘルパー4名の体制である。ケアマネージャーは村の職員であるが、ヘルパーは民間の訪問介護事業所（札幌の医療法人経営。在介の事務所を貸している）の職員である。

介護保険施行前は村の直雇用（嘱託）のヘルパーが2名いたが、施行時に止めてもらい、民間事業所に切り替えた。つまり、ケアマネ（村）とヘルパー（民間）に切り離れた。また、当初、民間大手のコムソンが入ったが2ヶ月で撤退した。

厚田のヘルパーは家事援助が中心のため、身体介護や特殊なサービスについては石狩市の事業所のヘルパーに依頼している。

ケアマネの一人はデスクワーク中心であり、厚田の広い地域を訪問介護や今後介護予防事業等でカバーするにはマンパワーの絶対的不足が叫ばれている。

### (4) 福祉・ケアサービス

#### <地域支援事業>

平成16年度に行なわれた事業は図表8のとおりである。

「転等予防教室」は一人につき3ヶ月サイクルで行っているが効果は出ている。

「いきいきリハビリ」は、「閉じこもり」予防の一環であり、望来地区としつ富地区で月一回行っている。高齢者の評判は良く、合併によって辞めてほしくないという声大きい。

「高齢者スポーツ大会」は削除された。

「配食サービス」は、特養のみよし園に委託し、1食300円で提供していたが、合併後、石狩市の方針で委託費の安い民間業社に変更し、1食350円での提供に変わる予定である。値上げとともに質の低下が懸念されている。

図表8 地域支援事業

地域支援事業	事業名	回数	人数	予算
通所型介護予防事業	健康相談	35	150	83,000
	機能訓練(A型)	24	170	257,000
	転倒予防教室	14	289	388,000
	いきいきリハビリ	24	143	48,000
訪問型介護予防事業	配食サービス事業	5日/週	28	2,924,000
介護予防普及啓発事業	健康教育	30	300	148,000
包括的支援事業	高齢者実態把握事業	100	100	0

### <村の独自事業>

村では独自の予算を計上して以下の3つのサービスを社会福祉協議会に委託してきた。

- ①除雪サービス : 社協以外にはまなす園(知的障害者施設)の協力員(15人位)やボランティアにも協力を依頼。冬季間が長く豪雪に見舞われる厚田では不可欠である。
- ② 布団乾燥サービス
- ③ 愛の電話(週1回、一人暮らし高齢者の安否確認)

これらの村のサービスは、合併後、社協の合併により縮小化されてきている。社協は石狩市厚田区の支所となり、スタッフも所長とパート職員の2名となった。

従来行われていた「オムツ支給」サービスがすでに廃止され、個人購入となった。「愛の電話」も見直しが検討されている。

以上のように、合併により、これまで村が担ってきた地域の福祉・予防介護サービスが縮小やサービスの低下という形で現れてきている。

改正介護保険制度で新たに創設された「地域包括支援センター」が今後、上記のサービスに責任を負ってゆくことになるが、すでに、石狩圏域(旧石狩市)、厚田圏域(旧厚田村)、浜益圏域(旧浜益村)の3つの日常生活圏域に各1箇所の直営センターが設置され、石狩圏域(旧石狩市)ではさらに民間委託のセンターが設置された。それぞれの運営協議会も発足した。

厚田圏域では、これまでの在宅介護支援センターが人員配置は現行のままで、包括支援センターに移行することになる。合併によるケアスタッフの人員の有効配分のメリットは厚田・浜益には当分もたらされないこととなる。今後、3つの圏域の独自性を尊重しつつ、ケアサービス、ケアスタッフ、サービス対象者、様々な情報が相互に有機的に交流することが求められる。そのために、運営協議会が十分に機能することが重要である。

なお、介護保険サービスの詳しい分析は第3章で述べられる

## 市町村合併について

厚田村は、2005年10月1日に石狩市・浜益村と合併して石狩市厚田区となった。合併問題調査研究報告書（石狩市・厚田村・浜益村合併問題研究会）においては、合併後に期待されること、懸念されることを以下のようにまとめている。

### 【期待されること】

#### ①行財政運営の基盤強化、効率化

組織体制の再構築、適正な人員配置による行政能力の集積、専任担当者による業務の専門化・高度化、さらには、情報化、男女共同参画、消費者対策、危機管理対策など、個別の政策課題への十分な組織体制づくりの拡充・強化が図られる。

管理部門等の経費節減、各自治体がそれぞれ個別に処理していた事務の統合、分散処理から一括処理への転換による節減効果が期待される。

#### ②まちづくりへの期待

広域的視点に立った、総合的かつ効果的なまちづくりが図られ、それぞれの地域が持つ産業、自然、気候風土、人など、地域特性や資源、財産を最大限に活用し、融合による相乗的な効果が生まれ、新しい地域価値観の創出、合併関連施策による大型事業、懸案事項の実現など、新たな施策展開が期待される。

#### ③住民サービスの向上

自治体業務全般を通じて専門化、高度化が進められるとともに、情報管理や情報処理能力の集積による効率的、効果的な住民サービスの実現が期待される。

#### ④地域間交流の機会拡大

自治体間、縦割的な住民、組織単位の交流から、単一自治体の住民、組織としての意識、連帯感の醸成による、住民自治への機運の高揚が期待される。既存の地域政策の交流や職員同士の交流が助長され、行政組織として発展的な成長が期待される。

#### ⑤地域の存在感とイメージアップ

暑寒別天売焼尻国定公園を含む南北およそ70kmに及ぶ海岸線は、観光資源・漁場として大きな魅力となる。また、石狩川・厚田川・浜益川の3河川に広がる穀倉地域は、多種多様な農産物を生産している。

海・山・川から享受する豊富な食糧資源・自然環境と、札幌圏の物流拠点である国際貿易港「石狩湾新港」との融合は、新しい都市の魅力と可能性の創出が期待される。

### 【懸念されること】

#### ①行政区域の拡大による弊害

本庁と支所（出張所）との役割分担から、機能、権能差が生じることも想定され、従来の役場が有していた行政機能の存在が遠くなる地域が生じること、それに伴い住民利便性の低下やニーズに即した行政サービスへの影響が考えられる。



また、行政機能や権能の中央集積化に伴う弊害、行政、議会への住民意志の反映がしづらくなる可能性も考えられる。

#### ②投資バランスの懸念

公共事業、公共投資が比較的人口の集中する地域へ偏りがちになった場合、中心的な機能・役割を担う地域と、そうでない地域との格差が広がることが予想され、過疎、高齢化の著しい地区はさらに拍車のかかる恐れもある。

#### ③住民サービス低下の懸念

各自治体が政策的に行ってきた独自の住民サービスが、見直されることに伴い、従前の行政サービスの低下が懸念される。

#### ④歴史・文化・伝統の希薄化

個々の自治体が培った、歴史・文化・伝統など、地域の特性が希薄化することが懸念される。

いわゆる平成の合併と言われる今回の市町村合併に厚田村は石狩市、浜益村との合併という選択を行ったわけであるが、合併後のスケールメリットによる財政運営の効率化がプラス面として強調されているように思われる。福島県における市町村合併を扱った既存研究<sup>4</sup>では、合併後に公共施設整備は進んだものの中心部への集約的配置であり、サービスが広域化されたことによって過疎化が進んでいた周縁部ではむしろ市民サービスが低下している点が指摘されている。今後、旧厚田村がどのように変わっていくのか、特に単身高齢者世帯や低所得者層といった社会的に弱い立場にならざるを得ない階層を注視した、市民生活レベルでの継続的な調査・検証が必要と考えられる。

#### 引用・参考文献

1. 石狩市・厚田村・浜益村合併問題研究会「合併問題調査研究報告」
2. 石狩市・厚田村・浜益村合併協議会「新市将来構想」
3. 厚田村史
4. 畠山尚子・中村攻・木下勇・権野亜紀夫「公共公益施設の変遷から見た広域市町村合併に関する一考察—福島県旧田人村と東白川郡鮫川村との比較—」農村計画論文集 No.3、pp.103-108 (2001)
5. 旧厚田村ホームページ
6. 石狩市ホームページ

\*厚田区の地域ケアについては、厚田村および浜益村の福祉・ケアスタッフ、厚田村特養および浜益村特養の施設長などのインタビューによるものである。

## 第2章 厚田村の高齢者の健康と生活・・石狩市への合併前の姿・・

### －アンケート調査分析－

#### 1. 調査の対象と方法

本調査の対象者は、2004年12月現在、70歳から80歳の在宅で暮らす男女全数（施設入所者、病院等入院者は除く）325名である。この年齢設定は、70－74歳の前期高齢者と75－80歳の後期高齢者を半々に含むものである。在宅でなるべく長く暮らすために個人が客観的に持っている条件やニーズを、まだ要介護年齢にならないうちに押さえていることが必要と考えるからである。又、比較調査という観点から浜益村とほぼ同様の年齢階層とした。調査方法と有効回答は以下の通りである。

調査対象：大正13年12月から昭和9年11月30日生まれの住民354名中、特養入所者、長期入院者29名を除く325名

有効回答：155名（男75名、女80名）、回収率47.7%

調査方法：郵送によるアンケート調査

調査期間：2004年12月下旬から2005年1月

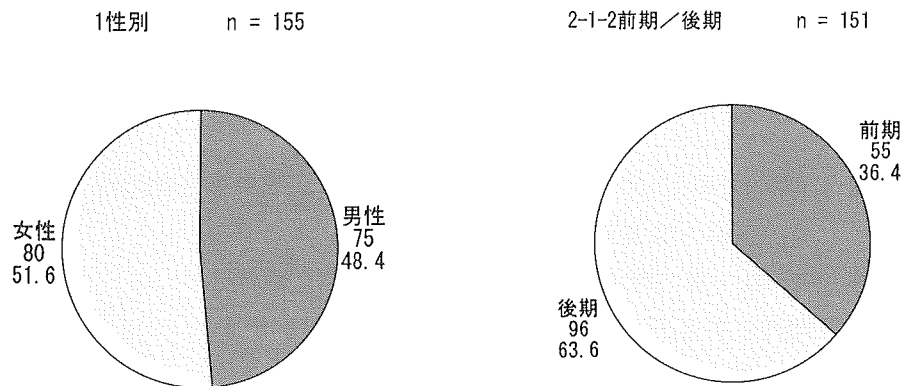
#### 調査デザイン

本調査は、在宅高齢者の基本的な生活状態と健康状態を把握するため様々な角度から質問項目を設定したが（調査票別添）、保健・医療的な観点からの質問項目よりも、高齢者個人が保有する家族や地域におけるリソースを把握することに主眼がおかれているのが特徴である。しかし、保健医療的な側面の把握を重要視しないというわけではない。個人の詳細なADLや疾病内容を聞いてはいないが、簡単な生活機能能力をチェックする項目や治療中の疾病、通院状態を質問し健康状態を把握した。しかしながら調査の重点は、在宅生活の社会的側面（社会関係＝ネットワークや日常生活圏等）の把握に置かれた。又、心配や不安、孤立感など精神的側面の把握、介護や世話が必要になった場合のサポートネットワークや行政へのニーズ等の把握に置かれた。このことは、身体的側面と同時に社会的側面および精神的側面でどれ位高齢者が自立的な生活を送っているのか、一方、それぞれの側面における老化の影響を把握することができ、改正介護保険制度における介護予防事業のターゲットの析出に有効と考える。

## 2. 回答者の基本的属性

### 回答者の性別と年齢

回答者は性別では男性 75 人、女性 80 人とほぼ同数であった。年齢については、前期高齢者（75 歳未満）が 55 名、後期高齢者（75 歳以上）が 96 名、無記入が 4 名であった（なお以降の記述では、無記入 4 名分のデータは除外して集計する）。性別と年齢のクロス集計では、女性の後期高齢者が 52 名（34.4%）と最も多く見られた。



上段:度数 下段:%		2-1-2前期/後期		
		合計	前期	後期
1性別	合計	151	55	96
		100.0	36.4	63.6
	男性	74	30	44
		49.0	19.9	29.1
	女性	77	25	52
		51.0	16.6	34.4

### 出身地

出身地について、「厚田村」が 52.3%と半数を超えて最も多く、次いで「道外」8.4%、「札幌市」7.1%、「当別町」2.6%、以下 2%未満（3~1 人）の道内市町村出身者が続く。男女別では男性の厚田村出身者 70.7%に対して女性の厚田村出身者は 35.0%と男性の半数であった。また、全体の 8.4%である道外出身者 13 名の内 12 名が女性であった。

上段:度数 下段:%		1性別			2-1-2前期/後期		
		合計	男性	女性	合計	前期	後期
2-2-2出身 市町村	合計	155 100.0	75 48.4	80 51.6	151 100.0	55 36.4	96 63.6
	厚田村	81 52.3	53 34.2	28 18.1	78 51.7	29 19.2	49 32.5
	札幌市	11 7.1	5 3.2	6 3.9	11 7.3	4 2.6	7 4.6
	当別町	4 2.6	1 0.6	3 1.9	4 2.6	2 1.3	2 1.3
	石狩市	3 1.9	1 0.6	2 1.3	3 2.0	1 0.7	2 1.3
	小樽市	3 1.9	1 0.6	2 1.3	3 2.0	1 0.7	2 1.3
	厚田郡古潭村	2 1.3	1 0.6	1 0.6	2 1.3	-	2 1.3
	浜益村	2 1.3	-	2 1.3	2 1.3	-	2 1.3
	望来村	2 1.3	-	2 1.3	2 1.3	1 0.7	1 0.7
	月形町	2 1.3	1 0.6	1 0.6	2 1.3	2 1.3	-
	登別市	2 1.3	-	2 1.3	2 1.3	1 0.7	1 0.7
	室蘭市	2 1.3	-	2 1.3	2 1.3	1 0.7	1 0.7
	和寒町	1 0.6	-	1 0.6	1 0.7	-	1 0.7
	豊浦町	1 0.6	-	1 0.6	1 0.7	-	1 0.7
	函館市	1 0.6	1 0.6	-	1 0.7	1 0.7	-
	士別市	1 0.6	1 0.6	-	1 0.7	-	1 0.7
	置戸町	1 0.6	-	1 0.6	1 0.7	-	1 0.7
	滝川市	1 0.6	1 0.6	-	1 0.7	-	1 0.7
	赤平市	1 0.6	-	1 0.6	1 0.7	1 0.7	-
	正利冠村	1 0.6	-	1 0.6	1 0.7	1 0.7	-
	新篠津村	1 0.6	-	1 0.6	1 0.7	1 0.7	-
	上川町	1 0.6	-	1 0.6	1 0.7	-	1 0.7
	上川郡風連町	1 0.6	1 0.6	-	1 0.7	1 0.7	-
	十勝郡	1 0.6	-	1 0.6	1 0.7	-	1 0.7
	国後郡白村	1 0.6	-	1 0.6	1 0.7	-	1 0.7
	古手町	1 0.6	1 0.6	-	1 0.7	-	1 0.7
	栗山町	1 0.6	1 0.6	-	1 0.7	-	1 0.7
	幾春別	1 0.6	-	1 0.6	1 0.7	-	1 0.7
	音別町	1 0.6	1 0.6	-	1 0.7	1 0.7	-
	奥尻町	1 0.6	1 0.6	-	1 0.7	1 0.7	-
	道外	13 8.4	1 0.6	12 7.7	13 8.6	4 2.6	9 6.0
	無記入	10 6.5	3 1.9	7 4.5	9 6.0	2 1.3	7 4.6